

エルマン・デルスニスと黒田鵬心の芸術支援活動 「仏蘭西現代美術展覧会」開催を中心に

Writer

中川 三千代 NAKAGAWA Michiyo

筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 1年

《考える人》に代表されるロダンの作品は、いつ、誰が、どのようにして日本に持ち込んだのだろうか？

大正時代後期、日本に西洋美術の実物が殆ど持ち込まれていなかった時、フランス人の美術商エルマン・デルスニス(Herman D'Oelsnitz 1882-1941)はフランス現代美術の絵画、彫刻、版画、工芸品を大量に持ち込み、「仏蘭西現代美術展覧会」を含む大小合わせて数十回の展覧会を10年にわたって開催した。日本側からは、黒田鵬心(本名黒田朋信 1885-1967)が協力し、デルスニスと共に、展覧会の運営にあたった。この二人は、当時の日本にフランスからの美術作品を流通させただけでなく、作品鑑賞の機会を一般に広める上でも大きな貢献をした。私は現在、この二人の活動の意義や役割を解明すべく研究を進めている。

1922年にデルスニスは、上野で第一回「仏蘭西現代美術展覧会」を開催した。《考える人》もその時に持ち込まれた彫刻のうちの一つである。当時の新聞、雑誌では、大量の西洋美術品の実物がやってきたと大々的に報道され、会場狭しと、一般大衆も展覧会会場に足を運び、一大センセーションとなった。この展覧会は、展示物を販売する形式だったので、皇族、実業家、美術家、美術愛好家が作品を買い求めた。翌1923年、第二回「仏蘭西現代美術展覧会」が無事終了した秋、関東大震災が起きた。デルスニスは震災後直ちに日本救済の展覧会を企画したが、フランス政府の協力は受けられず、独力で展覧会出品作品の蒐集にかかった。また、彫刻に

ついては、ロダン美術館に頼んでロダンの《接吻》《イヴ》《青銅時代》などを鋳銅してもらい、マルセイユから横浜へ船で運んだ。友人からは、震災直後の日本での展覧会開催は失敗するだろうと言われたが、デルスニスは「今こそ前年の展覧会成功のお礼に展覧会を開催する義務があり、自分一人が責任を背負い困難に耐える」と言って、展覧会開催の意志を貫き、1924年5月に第三回「仏蘭西現代美術展覧会」を開催した。その時の入場料収入の一部が、東京の被災民救助の為に寄付されたという記録がある。この展覧会に先立って震災の翌年2月に、小規模な「水彩素描版画展覧会」が黒田の尽力で開かれた。それは、東京で開かれた震災後最初の展覧会だった。

「仏蘭西現代美術展覧会」が東京・大阪で開催された後に、展覧会の主な作品を選んで、巡回展を開催することもあった。福岡、別府、京都、金沢、富山、名古屋、横浜、新潟、仙台、札幌まで赴き、黒田は講演会などの啓蒙活動も含めて、フランス美術を紹介して回った。

こうしたデルスニスと黒田の活動によって持ち込まれた作品のいくつかは現在も見ることができる。冒頭であげた《考える人》は、現在京都国立博物館の前庭におかれている。また、2012年4月に、リニューアルオープンした東京都美術館の講堂入口壁に、ジョセフ・ベルナル作の浮彫《ダンス》が飾られているが、この作品は、1926年東京府美術館の落成記念として、デルスニスが寄贈したものである。

写真の彫刻は、東京藝術大学の藝大アートプラザ中庭にあるロダン作《青銅時代》である。《青銅時代》はもともと石膏製のものが展覧会に出品され、その後、学生の学習に役立つようにと、デルスニスによって東京美術学校(現・東京藝術大学)に貸与されていた。しかし、不幸にも関東大震災で壊れてしまった。彫刻家の朝倉文夫教授によってすぐに修復されたのだが、その話を聞いたデルスニスは、新たにブロンズ製のものを寄贈したのである。

関東大震災や昭和恐慌といった困難の続いた時代に運ばれた作品が、美術館や学校などの公共施設で文化財として守られて、現在を生きる私達の前に姿を見せてくれている。デルスニスと黒田の情熱と実行力、国を越えた協力で成し遂げられた活動は今こそ評価されるべきだろう。



ロダン《青銅時代》
(左) 東京美術学校(1927年2月22日東京朝日新聞)
(右) 東京藝術大学アートプラザ中庭(2012年8月筆者撮影)

高等学校美術科教師による授業の構想と実践

Writer

輿水 愛子 KOSHIMIZU Aiko

筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 2年

美術の授業は、題材の選択から伝達する知識や技術等の決定まで、美術科教師の意図や価値観が反映される度合いの大きい分野であるといわれる。学習指導要領における指導の規定も他の教科・科目に比べて美術科(この文章では、科目としての美術をこのように表記する)は教師に裁量のある記述になっており、また“美術”というものの自体、その捉え方は人によって異なる。だからこそ、日々行われる美術の授業は教師のどのような考えのもとに構想され、また教師のいかなる体験や知識が反映して実践されているのか、私は非常に興味がある。この関心を起点として、私は高等学校の美術科教師へのインタビューと授業実践を通して、個々の高等学校美術科教師がどのような意図や体験をもとに日々の授業を構想し、それらがいかに実践に反映しているかを考察する事を目的に研究を行った。また、本研究を行うにあたっては、私が将来高等学校の美術科教師を志望しているという個人的な事情も少なからず含まれている。

この研究では、全国各地の公立高等学校に勤務する5名の美術科教師に調査の対象として協力を頂いた。調査は、授業実践の観察に基づく【実践の特徴】の整理と、授業の構想と実践に関わる意図や体験を問うインタビューを行い、その発話の分析により〈授業を構想・実践する要素〉を生成することで行った。今回は5名の教師への調査のうち、山梨県のある高等学校の教師の事例を紹介したい。

この教師の授業「地球コレクション」では、「今、地球がおもしろい！」をテーマに、生徒それぞれが「地球」について抱く問題意識やメッセージを球体をベースとした立体造形として制作する。この授業の構想には、教師は作品制作を通して生徒に〈グローバルな視点で物事を捉えるきっかけ〉を与えたいという意図がある。そしてこの考えが生み出される背景には、この教師が現役の〈現代美術作家として活動〉していることが挙げられる。作家として活動するなかで実感した美術や社会に関する今日的な課題を生徒に伝えていきたいという思いがあるとともに、現代美術の、社会的な問題を視覚表現として再現するという側面を授業題材にも取り入れていることが分かった。また、球体を造形のベースとし、限られた形体の中でいかに問題意識などのイメージを視覚的に表現するかということを生徒に課すことで、造形表現における発想と工夫を促すことを意図している。また、授業観察で抽出された【造形的指導の充実と材料・用具の豊富な準備】においては、〈技術面での苦戦〉や〈素材に触れる経験の不足〉等、生徒が抱く課題や問題点に取り組むうえで教師の作家としての体験が活用されている。

5名の教師の授業の構想と実践に関連する考えや背景となる体験はそれぞれ異なる。一方、多くの教師が共通して、美術科教師自身の役割として生徒と美術を繋げる媒介者としてのあり方を意識していたことが分析された。また、各教師の他者や情報と繋がる機会や方法は異なるが、それぞれが授業の着想や美術科教育に携わる上での原動力を学内外での活動を通して積極的に得るとともに、教師自らが既存の知識や概念に留まる事なく、絶え間なく変動する生徒や教育、そして美術の情報にアクセスし、題材として編集することを怠らず工夫し続けることで、多様な授業題材や指導の方法が生み出されていることが考察された。

本研究では、各々の教師固有の性質や特色、教師を取り巻くひと・こととの多様な関わりの中で授業が構想・実践されていることを明らかにすることができた。教師の意識や考え、体験は個人固有のものであり、一般化できる性質のものではない。しかしこれら5つの事例が示す創造的な授業構想のあり方は、今後、高等学校における美術科教師の実践や教師に由来する意識や経験などを明らかにする上での基礎的な知識として共有できると考えられる。私自身、教師となった際の参考として活用していきたいと考えている。



「地球コレクション」の生徒作品